

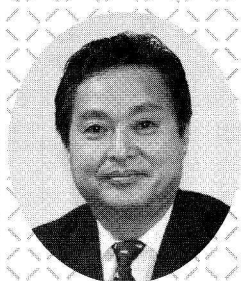
—2014夏—

水と風情 樺太(サハリン)紀行

現地ルポ

(Ⅲ)

真柄秀明



翌日9時、オブシヨナルツアーで真岡へ向けて出発する。直線距離ではそれほど遠くはないが、豊原から一旦南下して北上する道であるため、2時間程度の道のりになる。ソ連時代、食糧、穀物調達危機を解消するため全土に展開されたコルホーズ(集団農場)は、ソ連崩壊とともに解体した。樺太でも、郊外にでると放置されたコルホーズの農地が点在。開墾とは逆に農地から荒野に戻っていく過程が車窓に流れる。

道中、注意しなければならないのはトイレ。都市部のマナーケット等のトイレは一応整っているが、公衆トイレは全くと言ってよいほど、ない。ましてや街を離れると皆無である。男性にとっては沿道のいたるところがトイレであるが、女性は朝から水分摂取を控えないければならず辛い。唯一途中にトイレを借りることができるかも知れない施設があるという。それも行ってみての話である。

道中ガソリンスタンドは比較的多く目に入る。ガスの欠乏は怖い。ガソリン価格はレギュラーで1リッター36。1ルーブル、約1

18円。一般庶民の月給を6万円と考えると結構高い。

道沿いに立つ電柱はコンクリート製もあるが、圧倒的に木製が多くしかも細い。50年前の北海道の農村のようである。発電所と結ぶ高圧線は鉄骨ながらやはり細く、送電線自体も細く本数は多くて3〜4本の数、送電能力のインフラの脆弱さが垣間見える。

樺太の電力はプーチン大統領が再生エネルギーの推進を表明し、今後再生エネルギー投資の拡大が見込まれているが、現状ではまだ既存の火力発電に頼る。能力は、発電、送電ともにトータルとしては充分とは言えず、今後の需要増に充分に対応できる状況にはまだないようだ。ロシアは地域によって電力システムが異なり価格も大きな差がある。樺太を含む極東は価格が高く、今後の振興にあたっての重要な課題の一つである。日本では経産省と産業界が共同でインフラ輸出ターゲットの1つとして樺太および極東の電力開発を見据えており、ロシア電力政策のウエイトがより極東に向うように期待する。日本への電力輸出の構想

も持ち上がっているようだ。

1時間超走った。庭にダリアが満開の宿泊施設で樺太犬の門番が吠える。通訳が交渉して、無事にトイレを借用して一息ついた後、

真岡市街をはるかに望む熊笹峠にあるロシアの終戦記念碑に立ち寄った。終戦時ロシア軍を迎え撃つために構築した日本軍のトーチカが草むらに今も残る。この中に潜み上陸するソ連軍を迎え撃って最後の戦いを挑んだのだ。戦勝者には大きな勝利記念碑(御多分にもれずモニュメントの天辺にはおなじみの大砲が展示)が残り、敗者には草生した塹壕が残るのみ。戦争というものの本質をまた一つ見た。それにしても、武器を展示することが好きな国民だ。

熊笹峠から真岡へ一気に下る坂道は迫力がある。幅広く見通しが良く快適な道だが、かなりの急坂だ。登ってくる大型トレーラーの喘ぎが聞こえる。近年山を削って整備しようだが、整備前は相当な難所ではなかったか。

真岡は大陸との交通の要所にあたる港湾都市で樺太第二の都市。

人口はピーク時5万人超を数えたが、ソ連崩壊の経済混乱で減少し、2010年の国勢調査では31000人である。

まず、真岡港北に広がるプリモールスキー公園に到着、市民の憩いの場らしく、小さい子どもがゴーカート等で遊んでいる。脱線するが、ロシアの子供はものすごく可愛い。まるで人形のように。また若者はハンサムで、若い女性はスマートで実に美しい。オリンピック等で活躍する美貌の体操選手やバレリーナが特別な存在ではないのだ。それがどうして? その他の年代については特に書かない。真岡港の防波堤はかなり傷んでいる。やはり長く放っておいた印象だ。いかにも年金生活者のよう

な老人仲間が釣りをしている。北海道でいう「チカ」の仲間だろうか、ぼつりぼつりと釣れている。

一休みの後、真岡でどうしても見たいポイント、王子製紙真岡工場跡に直行した。鉄道と港湾に挟まれた、工業立地としては最良の広大な敷地にそびえる巨大な塔と2本の大煙突と6階建ての事務所ビル、それを囲むように広がる製造施設。しかしながら屋根は落ち、壁は崩れ、窓はガラスがなく、全

てがこれ以上ないというほど朽ちている。以前施設内に入った人の話を聞くと野良犬が住み着いているということだ。野良犬というと樺太には野良犬が多い。旅行の注意事項の中

に、狂犬病の恐れがあるため野良犬に触れないようにとの記述が有るほどだ。

樺太、真岡、王子製紙にゆかりのない日本人にもショッキンな光景だろう。



勝利記念碑 (熊笹峠)



朽ちるばかりの旧王子製紙真岡工場

まして今回はツアー客にはゆかりのある人が多い。しばし皆声が出ない。真岡に17歳の時にすんでいたという女性の目には涙が浮かんでいた。この工場跡は近く取り壊しが決まったと聞いた。樺太が今後発展するためにはこの工場跡地の活用は欠かせないであろう。これまで廃墟になりながら残っていたことが奇跡と言える。それだけ、ソ連時代、ソ連崩壊後を通じて投資が低調であったことを物語る。

この工場跡を見下ろす高台に、高さ6尺程の鎮魂碑がある。1995年8月に真岡町関係者有志が建てたものだ。寄付者が700名ほどの氏名と共に、新王子製紙、日本製紙、本州製紙、北海道拓殖銀行、福島石油、丸茶

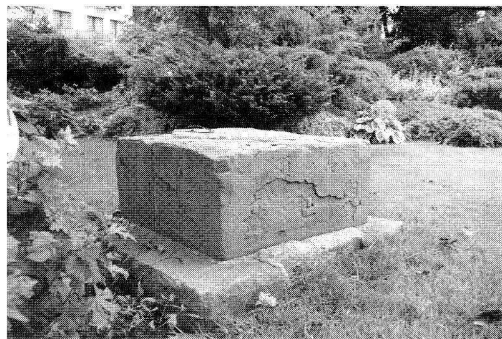


日本の有志による鎮魂碑

の企業名、全国樺太連盟、東京真岡会、札幌真岡会、苫小牧真岡会、真岡中学校東京同窓会、真女同窓会五月会、真岡一校・四校の会、真岡二校の会、真岡三校会、札幌真岡中・女学校同窓会、真岡中・女学校同窓会、札幌真岡一校の会、岡崎工業団地協同組合、の企業団体名の記載がある。碑文は「ここに眠る諸霊を鎮め平和と友好を祈念し 真岡町関係者有志が望郷の想いをこめてこの碑を建立した」と日露両言語で書いてある。祖父の墓がわからないため兄とともにこの鎮魂碑を墓石と思ってお参りをした。

次に「展望台」に向い、着いたというので驚いた。確かに真岡港を一望できるのだが、坂の途中の

駐車できる空地という程度。背後には、大きなアパートが立っていて、いくつかの窓から人が顔を出している。港を展望している我々を背後から展望しているのだ。港よりもそちらに気を取られてしまう。外壁は樺太らしく殺風景なコンクリート色で手すりなどは錆びているが、それだけに窓辺の鉢植えが美しく見える。本当に花が好きな国民だ。港へ目を転じると、大陸ワニノと真岡を結ぶ旅客フェリー連絡船が係留されていた。大陸と樺太は軌道規格が異なるため真岡で台車交換をするようになっている。現在は樺太鉄道の広規格化を進めているのでいずれ交換も必要なくなるだろう。港には荷役クレーンの数が6基、港外に大型貨物船が停泊し物流の重要拠点と



馬頭観音の台座だけが残っていた(旧真岡神社)

なっていることがわかる。

市内高台にある真岡神社跡地へ移動した。樺太神社同様鳥居、拝殿本殿の社はなく、すり減った石段にだけ過去の存在を感じることができ。こちらの社跡には5階建てのサハリン船舶会社のビルが建っている。社の痕跡は何もない。駐車場わきに馬頭観音の台座だけがぼつんと残っていた。昭和3年5月8日、田中文治ご夫婦が建立したもので、残念ながら所々剥がれ落ち、大切にされている様子はない。

映画「樺太1945年夏 氷雪の門」で有名な真岡郵便電信局の女性電話交換手9名の悲劇はご存じだろう。1945年8月20日、玉音放送後も戦闘が続いていた樺太にソ連軍が上陸した当日、引上げをせず真岡郵便電信局に残留していた9名の女性電話交換手は青酸カリで集団自決した。極限状態での大人たちの身勝手とも思える言動と自決に至る経緯を知ると、「みなさんこれが最後です。さようなら、さようなら」の最後の通信には何度接しても目頭が潤む。はるかにカラフトを望む稚内の「稚内公園」には昭和天皇、香淳皇后の歌碑が立つ。

御製

樺太に 命をすてし たをやめの

心を思へば むねせまりくる

御歌

樺太に つゆと消えたる 乙女の

らの

みたまやすかれと ただいのり

ぬる

真岡郵便電信局は真岡の中心街にあったが、現在は高層(10階建)

労働者住宅が建っており、1階は「ロシア貯蓄銀行」の店舗となっている。一見では郵便局の痕跡は全く見当たらないが、添乗員さんの話によると、建物の土台はその当時のままとのこと。一応土台部分にレンズを向けた。

フェリーターミナルでトイレが利用できるというので、行ってみた。金属探知機横の女性係員(若い美人)に入っていくかと指で確認し、薄暗い建物へ入る。トイレへ行ってみたが「うっ」と一瞬息を飲む。和式の水洗なのだが、バケツに水が汲んでありブラシが入っている。小の用足しをして水を流したが水流が細い。小では無い時に使用するバケツとブラシか? トイレはインフラと上下水道の現状を物語っている。州都豊原よりもさらに整備が遅れているのだろう。大型商業施設のトイレはまだ安心して入れるレベルにある。

自由市場へ行ってみた。19万都市の豊原と比較するとかなり小規模だ。肉は冷蔵施設のある店舗で売られているが、魚介類は水もな

く常温の露店で平気で売られている。日本では1万円以上はしようかと思われる毛蟹が1000円程度で売られているのだが、脇に生の鱒等がかなり強烈な匂いを発して積まれており、購買意欲を削いでいる。

ベリイ類とキノコは真岡でも種類、量ともに豊富だ。先の鮮魚(?)店のような例もあるが、全般的に豊かな食材に恵まれていることは豊原と変わりはない。

真岡には実質3時間半程度の滞在ながら、豊原に勝るとも劣らないインパクトのある観光が出来た。祖父の没した地を訪れた満足感と、日本が消えてゆく寂しさを強く感じながら、熊笹峠の登り坂に向った。

三日目のデイナーは、高級ゲルジアレストラン「バグラチオン」。ピョートル・イヴァーノビッチ・バグラシオン(1765~1812)はナポレオン戦争時のロシア帝国の将軍で、「ホラボルムの戦い」「フィンランド戦争」等で知られる英雄。「戦争と平和(トルストイ)」にも登場する。

骨ごと引いた挽肉のスープ、ホロジエツツ(煮凝り)、シヤリク(バーベキュー)。よくある旅番組のタレントのように表現力が乏しくて申し訳ないが、旨い!

樺太での食事はこれまで大満足。外れがない。バグラシオンのウェイターはみんな若くてハンサム、礼儀も良い。他の店と違ってちょっとした笑みも見せる。やはり、外国人の客が多い店は多少違うのだ。食事中、若い日本のビジネスマンが外国人とともに入店してきた。サハリン2の関係者か? 接待をしているようだ。日本で当たり前にみる光景だが、こちらで見ると新鮮な感じがする。頑張れ日本のビジネスマン、頑張れ日本の若者。

いよいよ最後の豊原の夜。森進一の「盛り場ブルース」が浮かんできた。「まおか、とよはら、おどまり〜♪」。豊原は港町ではないが、「樺太三大都市ブルース」とでも言おうか語呂があう。ゲルメスという日本語と円が通じる土産物店では、マトリョーシカや琥珀製品等のロシアで馴染

みの土産が数多くそろっている。

特別に樺太土産というものには気が付かなかった。ルーブルを使い尽くし、ホテルへ戻った後、連日歌声が気になっていたホテル裏手のガガーリン公園のビヤガーデンへ皆で出かけた。中年の男性歌手の歌声に惹かれ、蚊がうるさい中、テーブルにつく。セルフサービスのビールを飲みながら、ライトが点滅するステージに目をやる。「百万本のバラ」等、日本でもおなじみのナンバーを加えてステージが進むが、ベッドで聴いたFMのよう、実に趣がある。ロシアは芸術の国だと思わせるものがある。我々が日本人とわかったのだから、急遽、ザ・ピーナッツの「恋のバカンス」を歌ってくれた。嬉しかった。親近感がグッと湧いてくる。

真岡旅行の疲れと蚊の攻撃に負けて、早めにホテルへ退散。カラオケを楽しんでメとした。

翌朝8時、大泊に向けてホテルを発つ。72時間限定のビザなしツアーなので遅れは許されない。個人の都合で遅れると不法滞在で大

問題になる。大泊港到着時と同じ
出入国管理事務所へ。狭い事務所
とあのガラスにひびが入ったマイ
クロバスでの乗船であるから時間
がかかるのは覚悟していたが、手
荷物検査に並んでいると突然、検
査機のモニターを監視していた係
官がいなくなった。他に係員が複
数いるのだが誰も扱おうとしない。
15分程経ったであろうか、今か今
かと待ちわびている行列をかき分
けかき分け担当者が戻ってきた。
何事もなかったように検査を再開
する。もちろん全く無表情で。こ
れも添乗員が言っていた「ロシア
ですから我慢してください」の一
つなのだろうか。あるいはバスが
戻ってくるまで待合室が混雑しな
いための合理的な15分であったの
か。

「わっかない わっかない」
♪心にしみる。第二コーラスか
らは日本語になっている。「この
町港町希望にあふれて心が若い町、
綺麗な街並み整い気持ちいいこの
霧晴れの町、この町市場町はるか
に眺めるサハリン宗谷海峡の町、
寂しさと和ますやさしさたずねる人
たちの来るこの町、わっかない
わっかない」 困んで輪の町にい
て わっかない わっかない
幸せ喜び合って」
日本語の感じではロシア人の作
詞か？ どこかきこちなさがある。
記載した歌詞は聞き取りであるの
で正確ではないかもしれないが、
ガガリンホテルのベッドでFM
ラジオから流れたあの哀愁がよみ
がえる歌だ。帰国して色々探し
てみた。樺太のジャズバンド、ヴ
レーミヤ・ジャザが歌う「稚内」
という曲だということがわかった。
女性ボーカルが歌う美しい歌だ。
ロシア人の作った歌であることが
嬉しい。海外旅行をすると、その
日数にかかわらず、帰国の際はホ
ッとする部分が強いのが常だが、
今回は「まだ帰りたくない」とい
う思いが強く湧いた。「稚内」の

歌がさらにその思いを強くする。
皆で樺太に行こう！
今回の旅行で強く感じた。恥ず
かしながら、自分の父の生地、祖
父の没地であるのもかわらず、
あまりにも何も知らない自分に気
づかされた旅だった。
樺太がロシア領か否かの問題で
はなく、樺太は地理的に、歴史的
に、経済的に日本と切り離せない
隣地であり、大きなポテンシャル
をもつて今まさに羽ばたこうとし
ている。
年配の方々には過去を尋ねる観
光スポットであると同時に、若者
にとつては極めて大きなチャンス
が待っている地域でもあるのだが、
一般的には関心が薄く、容易に渡
樺太できることも知らない。若い世
代には樺太の存在すら知らない世
代もいることだろう。
今はまだ多くの樺太出身者や居
住経験者が生存しているが、戦後
70年を経て皆さん高齢化が進んで
いる。命あるうちに、子や孫にと
もに自分の生きてきた証を確かめ
に行くのは今だ。
そしてまた、新しい時代に羽ば

たく若者、チャンスを求める若者
は、求めるなら21世紀に残された
新天地樺太。行くなら今からだ。
道北の活性化、特に宗谷圏の活
性化は少子高齢化、人口減少の進
む中、札幌、内地依存のみでは限
りがある。稚内市は地理的に宗谷
海峡を挟んでわずか42^キ離れた樺
太に向けて開いている。内地は地
理的には700^キ離れた背後にあ
る。やはり樺太との宗谷経済圏に
注目し、ロシアの極東投資に密着
し開発を支援し成長を取り込むこ
とが必須だ。そして、そのことは
国の進める地方創生の一つのモデ
ルにもなりうるだろう。今回の旅
行で見た限りでいわせてもらうと、
現状のロシアの極東投資はまだ表
面的なメンテナンスに留まり、イ
ンフラ投資を含む本格的な開発に
は至っていないように思う。掛け
声と檄、単なる予算付けだけでは
極東の開発は進まない。日本の持
つ、技術、ノウハウが必ず必要と
なる。その一番手、先行して投資
すべきは水インフラだろう。でき
るだけ早いうちが良い。ハード、
ソフト両面において日本がその存
在を示すチャンスだ。

コンスタンチン君という名前を知っているだろうか。1990年、当時3歳だった豊原在住のコンスタンチン君が熱湯で全身90%に及ぶ重度の火傷を負い、症状が重く3日の命とみられていた。当時豊原を訪れていた一般の日本人がこのニュースに接し、北海道庁国際交流課係長に救援を依頼、国際交流課係長がサハリン州知事を説得して、正式な救援申請を取り付け、札幌医科大学の医師、千歳航空基地所属のパイロット2名を含む総勢13名のチームが、外務省の仮上陸許可を得て丘珠空港を飛び立った。ソ連側も承知とはいえ、当時は冷戦真っただ中、しかも樺太西方沖大韓航空機墜落事件で東西の緊張が高まっていた時期である。

ソ連側のスクランブルの危険がないとは言えない中、YS11による決死の救援作戦と言っていいたいだろう。

機中での初期治療と困難な手術の結果、コンスタンチン君は死の淵から生還した。NHKの「プロジェクトX」にも取り上げられた救援劇であった。日本とソ連の様々な障害を越え「少年の命を助

けたい、助ける！」という純粹な一心が国を動かし、イデオロギーや国境を超越してチームが形成されたのだ。

「国が違っても困ったことがあったら人間は助け合えるのだと思います」。母親のタリーナさんの言葉だ。「遠くの親戚よりも近くの他人」という諺が日本にあるが、好むと好まざるとにかかわらず隣人は常に隣にいる。関係を断つことはできない。

樺太ゆかりの有名な人は、昭和の名横綱大鵬、城卓也、せんだみつお、ユセフ・トルコ、若山弦藏、輪島功一等等、大変に多い。宮沢

賢治も教師として渡樺歴がある。身近な樺太を政治の問題だけでただ遠くから眺めるだけで良いのだろうか。先にも述べたように一般ベースでは双方が交流を望んでいる。樺太へ行こう！

9月24日で2014年のビザなし72時間渡航期間は終わった。船出前はウクライナ問題がエスカレートして渡航許可が取り消されるのではないかとの不安もよぎっていたが、無事に、充実した旅を終えることができた。帰国直前にはオホーツク海で、日本の捕鯨団付監視船がロシア国境警備隊に

拿捕されるという事件があった。船内で「妙に軍艦が多いね」と話していたが、この事件が関係していたのだろう。緊張が続いている現実を見せつけられたが、今回、真岡の製紙工場跡地をみて涙したおばあちゃんのことを思い出すと来年以降もまた樺太との交流が末永く続くことを願う。

樺太旅行は北都観光株式会社の米田専務に頼むと良い。樺太を知り尽くしているため、希望にあったツアーを組んでくれる。「釣りツアー(ハンター付)」等の実績もあるらしい。今回の旅では、東京稚内会の小坂会長、稚内市の工藤市長、建設産業部の日向寺部長、観光交流課の渡辺課長、佐藤サハリン課長、稚内市サハリン事務所

の渡辺所長、皆様に大変お世話になった。皆さんが稚内に対する郷土愛と同じように樺太を愛していることに感動した。

「わっかない わっかない」
今も耳に思い出が響く。

(完)



記念撮影